ショート・ストーリー（1）　ロシア SF 映画“両棲人間”　　野澤和男

経緯：ロシア映画“両棲人間：Ч е л о в е к - а м ф и б и я”の物語を短編小説風に描いた。

1）原作：ロシアの SF 小説家アレクサンドル・ベリャーエフ（1884-1942）の児童向長編小説（1928）

映画：両棲人間：Ч е л о в е к - а м ф и б и я　　1961 年製作　空想映画

監督：ゲンナージ・カザンスキー（1910-1983）

2）登場人物：

青年（両棲人間）：イフチアンドル、娘：グチエーレ、青年の父で博士、外科医：サリバートル、娘に好意を抱く新聞記者：オルセン、金持ちで狡猾/強欲な真珠商人：ペドロ・ズリタ、グチエーレの父で真珠ダイバー：バリタザールなど

3）ショート・ストーリー：

▼とある港町は今日もパニックに襲われ多くの人だかりでごった返していた。きらめく海に銀色ずくめの装束、つまり、スキューバダイバーのようなキャップ、ウエットスーツ、足鰭をつけて泳ぐ半漁人 sea devil の影を見たと言うのである。真珠採掘で一儲けを企む狡猾無慈悲な商人ペドロは帆船“Medusa”上で多くの作業員を怒鳴りながら働かせていた。老真珠ダイバーのバリタザールもその一人である。彼はペドロから借金の抵当として美しい娘グチェーレとの結婚を迫られていた。その彼女が遊泳中にサメに襲われる事件が起こった。ペドロはボートで救助に行くがどうにもならない。‥‥まさにその時、海中で遊弋していた両棲人間イフチアンドルがその光景を見つけサメに挑みかかった。サメの腹部は一文字に切り裂かれ大量の血が拡散し浮上していった。娘は揺らめく海草群の生える海底に気絶して横たわっていた。イフチアンドルは娘の美しい顔を見つめやがて両手で救い上げて海面に浮上、顔をみられぬように両腕に横たわる娘を空中に差し上げてペドロのボートの中に入れた。驚くペドロが確認できたのは銀色に輝く頭と両手のみで、光を残して海中に沈んでいった物体が何者なのか知る由もなかった。一方、イフチアンドルは助けた海底に戻った。海藻に絡まって揺れ動く娘のものであろうバンダナ状の真っ赤な小切れを見つけ大事そうに掴むと何処ともなく泳ぎ去った。船上に上がったパブロはバリタザールにサメを切り殺してグチェーレを助けたと恩を売る風に言いふらし、sea devil の捕獲に執念を燃やした。

▼グチェーレに心を寄せる新聞記者オルセンは友人のサリバートル博士を訪ねた。噂の sea devil の存在について取材に来たのである。研究所は海沿いの断崖の上にあった。博士は貧しい人々を助ける慈愛と人望のある天才外科医であった。歩行困難な人を歩けるようにし失明者に光を与えた。博士はオルセンに初めて長年隠してきた自分の秘密を打ち明けた。息子が不治の結核にかかり止む無く幼いサメの鰓を移植して水陸両方に住める両棲人間にしたこと、息子の安全と幸福を思う博士の夢だったのであろう弱者の住みにくい陸でなく無限の可能性を秘めた海に楽園を作る

構想を話した。オルセンは高度な移植手術の成功に驚きと称賛をもって聞いていたが、海も楽園とはなり得ず、やがて陸と同様に強者が弱者を支配するだろうと述べた。博士はエレベーターで海中の出入口に降りて息子イフチアンドルを呼び戻しオルセンに紹介した。礼儀正しく端正な顔立ちの好青年を見つめ握手を交わした後、オルセンは彼に尋ねた。「君は人や陸が恋しくありませんか？」　答えに戸惑うイフチアンドルを見ながら博士はオルセンに「今日はたくさん話したのでこれまでにしよう。今日話したことは誰にも話さないと約束してほしい」と念を押した。不治の病からの救出とはいえ、非合法な生体手術（異種移植）で息子を改造した倫理的法的責任を抱いている様子であった。
父親はイフチアンドルの最近の行動を新聞でみて心配していた。「私はお前が人間社会に係わってもらいたくない」と言った。すると　イフチアンドルは「私は昨日、サメに襲われた娘を助けました。彼女はとてもきれいで寂しそうでした。彼女の笑顔をまた見たいのです」といった。博士は驚いて「顔は見られなかったか？」と聞いた。そしてオルセンの先程の質問を思い出したのか、「よく考えて‥‥。もう寝なさい」と寂しそうに言って部屋を出ていった。イフチアンドルは赤いバンダナを取り出し彼女の優しい笑顔を回想した。グチェーレを忘れる事が出来ない、もう一度会いたいとの想いが募っていった。
▼イフチアンドルは初めて喧騒の街に出た。グチェーレの姿を求めて町中を探しまわった。何もかも初めて見る世界だった。水から長時間出ていたので肺が苦しくなった。汗がたらたら出て喉が渇いてきた。‥‥やっと見つけた噴水の池に飛び込み人々を驚かした。また、さまよい歩く。‥‥ついにオルセンと立ち話をするグチェーレを見つけた。一人になった彼女の後をつけて彼女の家に入り話しかけた。「君は僕を知らないが僕は君に会っている。僕は”I love you.”を言いに来たんだ。…」とっさの告白にグチェーレは怪訝な面持ちで見つめていたが、「それって一目惚れと言うことね！」とかわいい顔でほほ笑んだ。‥‥が、そこへ運悪く居合わせたペドロが出てきて「俺のフィアンセに何をするんだ！」と殴りかかった。警察がきて追われる。市中を逃げ回る。水が切れてあわやというところで市内を巡る散水車に遭遇し、飛び乗って水タンクの中に身を隠して逃げ帰った。
　「また会いに行かなければ…」　というイフチアンドルに父は「逃げきれたのは奇跡だ。人から隠しているのに‥‥。お前は海の中が一番安全なのだ。」と説得した。が、イフチアンドルは悲痛な顔で、「お父さん、なぜ僕を non-human にしたのですか？海で魚と一緒に暮らすのはもういやだ。孤独で寂しい。人を愛する権利を持つ人間になりたい」と切々と訴えた。息子を愛する父は悲しい顔で立ち上がり「お前は人間だよ。分かった‥‥。よし、行きなさい。でも海に近いところをね。危険が少ないから…」と言って立ち去る。その父を追いかけて「ありがとう！　お父さん　十分に気を付けますから‥‥約束します。」青年は満面の笑みを浮かべて父の両腕を掴んだ。
▼港では若者が集まり陽気なダンスに打ち興じていた。イフチアンドルはグチェーレを見つけ言葉をかけた。彼女は昨日のことを思い出し、「心配していたの。捕まらなくてよかった」　彼は「海の中がすてきだと思っていたけど今は君と一緒にいるのがとても楽しい」と言うと、グチェーレ

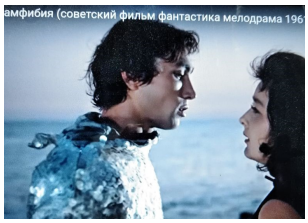
は「私たちはずっと前からの知り合いのように話すけどあなたの名前もまだ知らないの。…」と言った。はじめて、お互いに“イフチアンドル”、“グチェーレ”と名乗りあった。ネックレス入りのバッグが海中に落ちた時、イフチアンドルはすばやく飛び込み海底をしばらく探して取り戻した。彼女は大喜びして「海中に永久に潜っていられるみたい。あなたは誰なの？」と聞いた。彼は「悪いけど誰だか言えない」と悲しげに答えた。帰ってからもグチェーレの笑顔が忘れられない。赤いバンダナを見つめているうちに幻想の世界に‥‥二人は海中を連れ添って戯れながら泳ぐ。青い海、揺れる海草、泡、魚や白いクラゲたち…。翌日、再び会った。もはや恋人同士のようであった。イフチアンドルはグチェーレのために海底で採ってきた幾粒かの真珠を彼女に手渡した。喜んだのも束の間すぐに彼の手に返した。「諍いの種になるから…」という。頑なに拒むので彼は真珠を海に投げ捨てた。「イフチアンドル、なぜ捨てたの」と‥‥。彼は言った。「私の命を君に上げようと思ったのに受け取ってくれなかった。これは私を信じてくれない、つまり、私を愛してくれないということだ」と…。すると「聞いて！イフチアンドル、今度の日曜日に結婚させられるの。だけど私は結婚したくない。だからあなたと会ったの。理解して！」グチェーレは苦しい胸の内を明かした。…と、その時、ペドロが警官を連れて岩を登ってきた。イフチアンドルは両手に手錠を嵌められるや次の瞬間、断崖絶壁から海にダイブした。海面には大きな波紋の泡と帽子が残されていた‥‥。

▼日曜日、ペドロとグチェーレは教会で結婚式を挙げた。その後ペドロの別荘に着くとそれまでずっと悩んでいた彼女は覚悟を決めて部屋の扉をロックし閉じ籠った。そんなある夜、イフチアンドルがグチェーレの部屋に忍びこんだ。彼女は彼の無事を喜んだ。「私は水中で息ができる。”sea devil”と言われているが私は人間だ。父はサンバートル博士だ。あなたをサメから救ったのはペドロでなく私だ」と彼は隠していた秘密のすべてを話した。グチェーレは今までの謎めいた事柄をすべて理解し、「何故それを早く言ってくれなかったの」と言った。…脱出が遅すぎた。二人はペドロとその手下に捕縛され港の船に監禁された。ペドロはイフチアンドルの特異な能力を知りそれで莫大な富を目論んだ。彼を長い鎖で固縛して強制的に海底に下ろし休みなく真珠の採掘をさせた。苦しくて絶体絶命の事態となった。と、その時、父親のサリバートル博士がオルセンと共に小型潜水艦でペドロの船の近くに現れた。「息子を解放しろ！」 偉大な人道主義者、名外科医、科学者で知られていた博士の一喝に威圧され、イフチアンドルを解放して家に連れ帰った。博士はペドロの通報によりまもなく警察が来ると予測しイフチアンドルを海に逃がした。案の定、警察が乗り込んできた。博士は抵抗せずに逮捕に応じた。イフチアンドルも海への出口で待ち受けた潜水夫達によって捕まった。父子共に刑務所に連行され独房に収監された。イフチアンドルは狭い海水タンクに閉じ込められた。市中では『サリバートル博士が監獄に！”sea devil”ついに逮捕！Medusa 号が襲撃され船主パブロが提訴！』の号外に大騒ぎとなった。その頃、パブロがサリバートル博士の独房に面会に来た。狡猾な目をギラギラさせて言うには「私はあなたを救出できる。命、自由、研究所、金、栄誉、なんでも保証する。ただ、100，1,000 のイフチアンドルを作ってくれれば…。あなたも私も世界の海を征服でき大富豪となれる…」と。博士は怒髪天を衝く

物凄い形相で睨み激怒した。「悪党！ 出ていけ！」　パブロはまもなくグチェーレの父バリタザールに刺殺された。

▼看守が博士の獄舎に近づき密かに話しかけた。「博士、私を覚えていますか。私の息子の命があなたに助けられました。今度は私がお助けする番です。ただし、一人しか助けられません。」博士はイフチアンドルを頼んだ。看守はオルセンと救出の手筈を打合せた。決行は夜 9 時となった。…そしてその時が来た。看守は海水タンクに閉じ込められていたイフチアンドルを出し暗い廊下を歩ませた。もはや肺呼吸ができないほど弱っていた。父サリバートルの牢の前に来た時イフチアンドルは　“お父さん!”と言って駆け寄った。父は「あんな狭いタンクの中に入れられていたのか！悪党め！彼らはお前の肺を壊壊してしまった。‥‥息子よ！許してくれ…。お前を世界一幸福者にしたかった。でも最も不幸にしてしまった。…　私を許してくれ! さようなら」二人はじっと見つめ合った。‥‥看守はイフチアンドルを急かして建物の外の中庭へと導いた。その左側にオルセンのトラックが止まっていた。それを指さして看守は「走れ！」とイフチアンドルの肩を押した。その数秒後、「脱走だ！」との叫び声が上がった。サイレンが鳴り響きバラバラと出てきた守衛たちのピストルが鳴った。イフチアンドルを乗せたオルセンのトラックは猛然と正門の扉をなぎ倒し、後を追う警官らのオートバイを振り切って走り去った。

▼水が切れて朦朧としたイフチアンドルの体を波がひたひたと打ち寄せた。オルセンはうっすらと正気に戻ったイフチアンドルに安堵の笑みを浮かべ、グチェーレに「さあ…」と言ってその場を離れた。グチェーレは彼の蒼ざめた顔を抱いて「イフチアンドル！しっかりして…」と言った。イフチアンドルは「グチェーレ、僕は君を愛してはいけないことは知っていたんだ…。だけど、それはできなかった。人間たちは僕らを引き離したがまた会えることを祈っていた。誰も僕たちを引き離すことはできない。なんと不思議なことだろう…。でも、もう…『さよなら』を言わなければならない。あなたと会ったこの地をいつも思っているよ。君も決して忘れないで‥‥、君がいつか幸福になるのを祈っている‥‥」　二人は涙ながらに抱擁した。そしてイフチアンドルは波の寄せる沖合に向かって歩き始めた。波は膝を、腰を、胸を浸し首まで達した。そして、振り返った顔が大きな波に隠れたと思った次の瞬間、イフチアンドルの姿は見えなくなった。

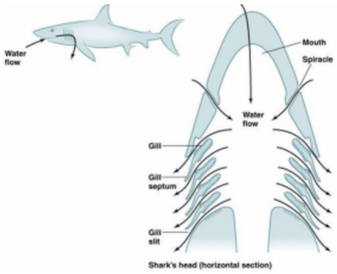


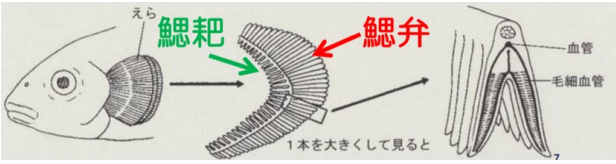
４）考察：

❶両棲人間：Ч е л о в е к - а м ф и б и я (The Amphibian Man)：ａ м ф и б и ｙ とは①両棲類、②水陸両棲植物、③水陸両用飛行機、④水陸両用戦車などの意味がある。両棲類とは脊椎動物門の一綱で鱗や毛がなく変態すると鰓を失い肺を生じて空気呼吸をする。淡水中か地上に棲み海産種はいない。カエル、イモリ、サンショウウオなどがいる。さめ（鮫）は軟骨魚類サメ目の魚で鰓蓋はなく鰓穴のみだが呼吸メカニズムは魚と同じである。日本語タイトル“両棲人間”は、純

粋で美しいこの映画のタイトルとしては寒々として気味の悪い響きである。メカニズム的には“魚人間”のほうがよさそうだが水陸というイメージに欠ける。

❷サメの鰓の移植：　臓器移植には、ⅰ）生体移植、ⅱ）異種移植（人間以外からの）がある。ⅰ）は肺、心臓、その他臓器の移植があり今日、倫理学的法律的に認められ良く行われている。イフチアンドルが今、生きていれば生体移植が可能なのでこの SF 映画は存在しない。サメの鰓の移植はⅱ）の異種移植の範疇で、現在、豚の臓器を移植する事例があるようだが詳細は知らない。サメ（魚）は口から取り込んだ水が鰓の鰓耙（さいは）・鰓弁を通過するとき毛細血管に酸素を取り込み炭酸ガスを取り出して呼吸する。よってサメは常に泳いでいなければ水を取り込めないため死亡する。





引用②

❸サリバートル博士親子の罪：映画では二人の容疑が明示されずに逮捕されており違和感が残る。推察してみる。

・博士の罪：愛する息子を生存させたいという肉親の情からサメの鰓の移植という異種移植を成功させたが当時の臓器移植法に則ったものか否かが罪の対象となろう。イフチアンドルを人間社会から隔離し隠していたこと、警察の逮捕におとなしく応じたこと等から博士は倫理的法的罪を自認していたのであろうか。

・イフチアンドルの罪：市民は勝手に sea devil なる呼称で怯えていただけでイフチアンドルの騒乱罪にはあたらない。また彼は船や漁具を破損させたり人を殺傷したりしたこともない。人妻グチェーレとの密会・救出未遂も彼女が嫌う狡猾で陰湿なペドロからの解放が目的である…などから見て罪となるものが見当たらない。サリバートル博士の裁判が進むにつれてイフチアンドルの罪の有無が明らかにされるであろう。

IT、AI、生命科学、ゲノム編集技術などが驚くべき発展を遂げている現代は倫理の境界を越えた臓器移植や生命誕生の危険性を孕む。第二の両棲人間が生まれた場合、現代社会はどう対処していくのであろうか。

❹本映画の印象：

不治の病によりやむなく両棲人間とされたイフチアンドルは父親の厚い庇護のもとに、海中で魚たちと平和に過ごす純粋無垢の青年であったが、美しいグチェーレとの出会いにより人間の愛と社会への興味を知った。グチェーレへの思慕はますます募るが…自分の忌まわしい正体を明かせない。尊敬する父に「どうして自分を“non-human”にしたのか」と迫る。何度かの出会いと危険の末、思いは究極に達して、ついに隠していた自分の謎めいた秘密をグチェーレに告白し彼女も

それを受け入れる。そして永遠の別離がくる。両棲人間という運命を背負うイフチアンドルと美しいグチェーレとの純粋な良心の共感、共鳴の昇華が心に響く。1962 年ソ連国内での観客動員数 1 位を記録した映画であることが肯ける名作である。⚓

参考：

① ロシア映画：両棲人間：Ч е л о в е к - а м ф и б и я :https://www.youtube.com/watch?v=q1c4UEfAEjo

② なぜ魚は海の中で生きていられるのか？：
http://tokushima-hst.tokushima-ec.ed.jp/project/?action=common_download_main&upload_id=5371